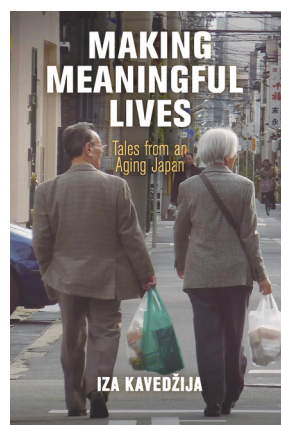


イザ・カヴェジヤ

『意味ある人生を——高齢化する日本の物語』

Iza Kavedžija, *Making Meaningful Lives: Tales from an Aging Japan*

ラー・メイソン

University of Pennsylvania Press,
2019

イザ・カヴェジヤ著『意味ある人生を』は、日本の高齢化という複雑な問題を深掘りしたユニークな一冊である。本書の最大の価値はその人類学的、民族誌学的アプローチにあり、ここから、「高齢化」が単に社会の漸次的衰退をもたらすネガティブな経緯、あるいはトツブダウンの施策を必要とする社会問題にとどまらないことが見えてくる。むしろ逆に、本書は高齢化という経験にもなう現象を幅広く検証して、その多くが日本固有のもの、あるいは日本独自の社会文化環境に由来することを示し、これが「高齢化問題」と意味ある良き人生とは、切っても切れない関係にある」という著者の全編つうじた主張を支えている(㉔)。本書は

さらに、著者が接した被験者の視点をとりこむことで驚くほど幅広い事例を提示してみせ、それが中心命題を得心のゆくものにな

るとともに、高齢化が国家と社会関係と、個々人の実体験する人の相互交流との境界にどう染みこんでいくかについて、当事者目線による洞察を際立たせることになった。

本書はたがいに関連しあう一連のケーススタディで巧みに組み立てられており、個々の物語の中で複数の人生が高齢化という関係性で結ばれていることがわかる(㉕)。これによって、介護対象としての高齢者という方への批判的検証(第1章)に始まり、政府の施策に依って能動的な共同体をいかに形成・維持するか(第2・3章)——政府と共同体双方の協力が不可欠——から、共同体の精神と行動とが意味ある人生をいかに充実させるか(第4・5章)へと、継ぎ目のない議論が可能になった。こうして本書は、人が人生航路で経験する愛と喪失、共感と仲間意識、目標

と野心など、人間のもつ感情や資質を全面展開していく(第6・7章)。学界の慣例に倣ったり、読者の思いこみによる期待を満足させたりするためだけの、概括的な結論を迷わず排除する著者の姿勢はいさぎよい。そして、高齢化という文脈において意味ある人生とは「雑然と、多面的に」(p.123) 顕現するものであり、自分の研究は実証主義的数量化というよりも、開かれた解釈にふさわしい形をとりたいと、著者は臆せず主張する。

デリダやサルトルなどのポスト構造主義者、リチャード・セネットのような共同体社会学者、日本学のジョイ・ヘンドリーやロナルド・ドーアなど第一線の人類学者らの洞察を用いた(分野をまたぐ)学際的アプローチからは、洞察と知見の魅惑的交差が生まれる。こういうもののおかげで、本書の研究対象である高齢者の人生が具体的・詳細に説明可能となり、日本の高齢化をめぐる議論がより広く、歴史的に充実したものになった。たとえば「本音と建前」のような日本人的概念についてのステレオタイプの見解は、被験者たちのあいだで交わされる活発ではあるがおよそ対立的ではない政治論議の実例によって、真つ向から否定される(p.12)。それと同様に、被験者の共同体で行なわれている隠居の道楽のもつ変革力の意味や、社会的に根付いたその役割も再検討される。これも大いに刺激的だ(p.12)。

いっぽう本書の限界はと言えば、その民族誌学的な焦点および

フォーマットに鑑みれば致し方ないことだが、学術文献としては参照項目がやや物足りなく、とくに被験者との対話が中心となる pp. 36-45、pp. 101-105、pp. 108-113、pp. 130-138 では、ほぼ全面的に欠落している。また方法論も、ある程度補足の必要な分野だ。確かに日本の都市部の高齢化に被験者を特化した人類学的ケーススタディが二件実施されているが、選んだ場所と状況のもつ特別な意味について、もつと深掘りできたはずだ。対象地域として関西を選んだことを正当化する主な根拠は、既存の研究でこの地域をカバーしたものがあまりないことと、そこが多様な社会経済性をもつ巨大な高齢者人口を抱えているということらしい(第2章)。しかし、当該地方自治体内のもつと規模の大きい地域でも、あるいは日本全国の動向としても、この関西地域の高齢被験者どうしの相互交流がどれだけ全体を代表するかは不明なままである。地域差に関する持続的分析のほか、文化的相違の要因となる他の交差要素に関する同様の分析も、まったく欠落している。こうした方法論的要素について詳しい説明があれば、本書はまちがいなくもつと充実したものになったであろう。この研究に見る状況網羅的・探索的性格は称賛すべきだし興味をそそるが、付加価値のある洞察によって実際に何が見えてくるかは——大阪の二つの区の高齢化する社会環境に存在する重層的な複雑さ以上に

——不透明である。

しかしながら、この研究は日本の高齢化社会についての文献に優秀かつタイムリーな貢献をした。そのきわめて独創的な民族誌学的ケーススタディというアプローチによつて、読者は「高齢化」を総体的に隅々まで見渡すことができる。また資料文献の質および解釈説明の深みのおかげで、高齢化経験の内実がよく伝わってくる。とはいえ、研究の性格上、そのさらなる含意は思弁的にとどまった。本書の主張、つまり人が生きた個々の高齢化経験、および人間による意味の創造の枠組を社会がいかに決めるかという観点から、「高齢化」には根源的再考が必要だという点は納得がいく。

翻訳・朝倉和子（SWEET所属）

*本稿は *Japan Review* 37 (2022) に掲載された英文テキストの日本語訳である。